

「会員短信 23」

「笑いの嫌いな人たち」

伊藤浩睦

ザ・ドリフターズの志村けんさんが新型コロナウイルスのために亡くなりました。ザ・ドリフターズの全盛期を思い出すと、笑いの嫌いな人たちとの壮絶な戦いの日々だったように感じられます。

日本社会には笑いを蔑視して、下品なもの、ダメなもの、許されないものとする一方で、真面目なことや、堅苦しい権威に大きな価値を見出している人が大勢います。そのような人たちにとっては、ザ・ドリフターズが作り出す笑いは、子どもの善導と道德教育を妨害する社会悪そのものであって、目の敵にされていました。私の母親もそのタイプの人間のひとりで、「お笑いなんか、馬鹿が馬鹿やっているだけで一番詰まらん」と言っていました。

生涯笑いを取ろうとしたことのなかった母親は、笑いは子どもの悪ふざけのようなことをやっていれば取れるものと思っていました。実際には、笑わせることは文芸としては最も難しい行為です。花鳥諷詠や客観写生は楽です。

最近では、講演などもさせていただくようになりました。全ての時間を真面目に堅苦しく喋れば楽なのですが、それでは聞いている人は詰まりません。つかみネタで先ず笑わせて会場の緊張をほぐし、聞き手の顔を見て固くなってきたら冗談を挿入して笑わせることが必要なのですが、その作業は滑稽俳句同様に難しく、滑ってしまうこともよくあります。

笑いはその難しさに反して不当に低い評価しか与えられていないのが日本の現実です。